

日税メールステーション特別号

～海外ビジネス情報～

あるビジネスマンの「アジア出張記。」

番外編（中国－上海編）

皆さんこんにちは。

3月まで全6回のコラムを連載しておりましたが、大変嬉しいことに、ご好評を頂くことができました。ありがとうございます。

「是非続きを」というお声にお応えして、番外編として中国(上海)編をお送りいたします。

■中国初上陸

この時が中国初渡航でした。今年の3月のことで、鳥 Influenza が取りざたされる前でしたが、PM2.5 が騒がれていた頃です。

前の年の中国での反日暴動は記憶に新しく、かなり緊張しながら現地入りしました。

幸いなことに、訪問先の企業にて送り迎えの車を出してくださったため、言葉の通じない地で Taxi に乗る不安はなく、安心して Hotel に入ることができました。

■空気の感じは

念のため、防塵マスクを日本で購入して持っていきました。しかし、現地の人でマスクをしている人はあまりいず、目立つ格好はしないほうが無難だろうということで、結局は使うことはありませんでした。

上海でお世話になった方にうかがうと、「北京ほどではないが、やはり喉が痛くなるのでうがいを頻繁にしている」とのこと。

空気の汚れのせいかどうかは分かりませんが、私は出張初日と二日目は鼻炎になり、ホテルの隣の部屋にまで聞こえる派手なくしゃみを繰り返し、同僚のH氏(カンボジア編で登場したH氏です)にだいぶ迷惑をかけました...

ホテルに入って遠くを見るとモヤがかかって見えましたが、別の日には遠くを見渡すことができたので、空気汚染のせいではなさそうです。

■英語が通じない！

宿泊した Hotel が日本企業が集まっている地区にあったこともありますが、ホテル内では日本語が通じます。上海市内に日本人が5万人いると聞きましたが、街を歩くと日本語の看板もよく見かけます。

こちらは中国語の勉強などまったくしておらず、「数字(1から9)と方角と三色(!)が言えれば大丈夫だろう！」と冗談半分で吹かしていたのですが、店で英語を使ってもほとんど通じず、準備してこなかった

たことを後悔しました。

一仕事終わった後に某 Hamburger 店でお茶をしていた時に Toilet に行きたくなったH氏、店内をうろろした挙句、Staff と思われる人に英語で Toilet の場所を尋ねました。まるで通じず、駄目元で日本語でも聞いてみても、はたして通じませんでした。英語の通じない海外出張は初めてです。

ただ、日本食の店があちこちにあるため、食事に困ることはありませんでした。

異国人の立場で外国に赴き「英語が通じないと不便」と感じましたが、日本はどうでしょうか。

鉄道などは表示に英語・中国語・韓国語を併記し社内放送で英語も流すことはされていますが、食事の Menu が日本語だけであったり、外国人も立ち寄りそうな街中の店で英語が必ず通じるわけではありません。グローバル化といいつつも、こういった日常的な部分も変わっていかないと ASEAN の国々に置いて行かれるなどあらためて感じました。

■上海出張

この時は、現地の日系企業を中心にお声掛けしてご参集いただいた方々向けの Seminar(日本語です)開催と営業活動、企業訪問を主に行いました。総経理の方とお会いして直に話をうかがえる貴重な機会です。

第6回の総集編で少し書きましたが、現地で事業を始めてある程度の期間が経ち、相応の業績をあげている企業の方々に、異口同音に以下のようなお話をされていました。

- ・人事制度に苦労してきた。現地の Consulting も受けたが満足できるものではなく、自前で工夫して現在の制度になっている
- ・中国の人たちは非常に優秀。飲み込みや立ち上がりも驚くほど速い
- ・転職が盛んで、人材の育成と流出が表裏一体のため、評価の仕方を含め非常に悩ましい

ある企業様では毎年行う評価と報酬改定が間もなく行われるため気が重いとおっしゃっていました。

中国人 Staff との面談では、

- ・あの人と比べて自分はこれだけ優れているから給与も上げてほしい
- ・希望が通らなければ他社に移る

ということがよく出てくるそうです。話には聞いていましたので「やはりそうか」という思いでうかがっていましたが、実際にどのように対応されているのかをお聞きしました。

「評価指標を細かく定め、上がっている部分などを可視的に評価できるようにしている。給与などの要求については、当方の考えと明らかに違う場合には、毅然とした態度で明確にこちらの考えを伝える」

とのこと。正統的な対応ですが、実際に相手を前にそれを貫くとなると並大抵のことではないのは私にも分かります。

別の方に聞いたことですが、部下や権限はないけれども名目上の Manager 職を作ってその肩書きを授けることで Staff の面目を立てて評価する、ということはよく使う方法だそうです。

■カタカナ厳禁

Seminar 前日に主催企業の方と事前打ち合わせを行った時のことです。翌日の Slide を印刷した配布物をもとに Review を行っていただきました。

日本で投影スライドを作っていました。当然のことながら、現地での聴講者にどう映るかを考慮していたつもりです。それでも先方から鋭いご指摘を受けました。

- ・発表資料中にカタカナが散見されるが、Alphabet で英単語を書くべき。
- ・ある会社での事例は、自社と比較して自社が劣ると「なぜ自分の会社にはこのような制度がないのか」と不満を表面化させる恐れがある。
- ・日本人視点の書き方になっている個所は中立的な書き方に直すべき。

カタカナについては、日本でのビジネスパートナーからも同じことを言われたことがありました。外来語の表音を不正確に日本語にしたカタカナが海外の人には理解しにくいというのはもっともなことです。日本人以外の人には「カタカナなどなくなってしまう！」と思うそうです。ただでさえ漢字で苦労するのだからこれは無理もない、と素直に同意できます。最近では、海外の人が読む可能性のある文書では、カタカナを原語表記するようにしています。今回のコラムで英単語表記が混ざっているとお気づきの方もいらっしゃると思いますが、その理由はこういうわけです。

2 番目の比較については、先に書いた評価制度とも関係してきます。他者と比較することで優劣をはっきりとつける傾向が強いようで、日本の横並びを好む傾向とは真逆です。絶対評価よりも相対評価のほうが可視的であるため、具体的な比較は実際的と言えるでしょう。とはいえ、私にはなかなか真似はできません...

「日本人視点」は、かなり気を付けていたつもりでしたが、考慮が足りないところがありました。日本と中国、雇用者と被雇用者、提供側と受け側など、必要があって区別している場合は別ですが、同じ地で一緒に仕事をしているのに「別々」という印象を受ける表現はやはり避けるべきです。

お会いした総経理の方々からお話をうかがって感じたのは、日本主導というお考えが想像以上に少ないことです。いかに現地の方に活躍してもらうか、能力を活かすか、ということを真剣にお考えです。日本本社の意向に沿いつつ現地の方式を確立し運用していくのは生半可なことではありません。試行錯誤とご苦勞をされながら、ここまでやってこられたのだらうと、感服いたしました。

■上海での食事にて

H氏と客先を訪問した後、Shopping Tower 内の Restaurant Floor（と言っても複数階にまたがっています）で昼食を取りました。

いくつか見た後に、麺類がおいしそうな店に決めて、店の前に立っている店員に「2 人」を意味する指二本を見せてみました。何と言っているのかは分かりませんが、入り口前の Bench の付近を指さして、よく分からない Ticket を渡してきました。二人して Bench に座って待っていると、後から来た客がその店員に声をかけて、ベンチの隣にある大きな液晶のついた機械を何やら操作して店内に入っていきます。そんな客が 3 組くらい続きました。

「ああ、あの機械の Touch Panel で注文をしてから店内に入るのか」とようやく察しました。しかし、その方法でよいのか確信は持てず、さらに、注文をして店内に入ったとしても、料理ができあがった後にどうやってそれを知って受け取りに行けばよいのか見当が付きません（店員が Table に運んできている気配がなかったのだ）。結局、二人して退散しました...

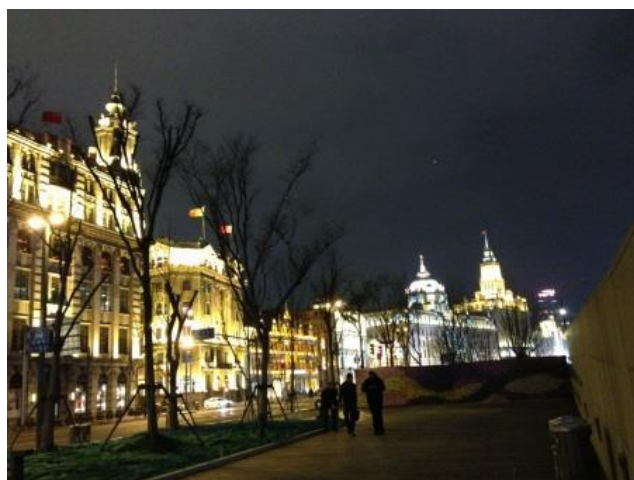
考えてみると、今まで英語が通じない所に単独で行ったことはなかったのです。何の彼ので、旅行客

やビジネスマンが多く来るために英語が使える所や、あるいは、現地の人に案内してもらって店に入っていました。もしくは、注文や支払の仕方は日本とさして変わらない方式のため、何とかなっていました。それが崩れると何もできなくなってしまう。結局その時に入ったのは、日本で有名な某居酒屋 Chain 店でした。ちなみに、この店では日本語は通じませんでしたが、注文時に英語で聞き直してくれたので非常に助かりました。「英語が使えると楽」などと私が言うてしまうとは、ちょっとのぼせてますかね...

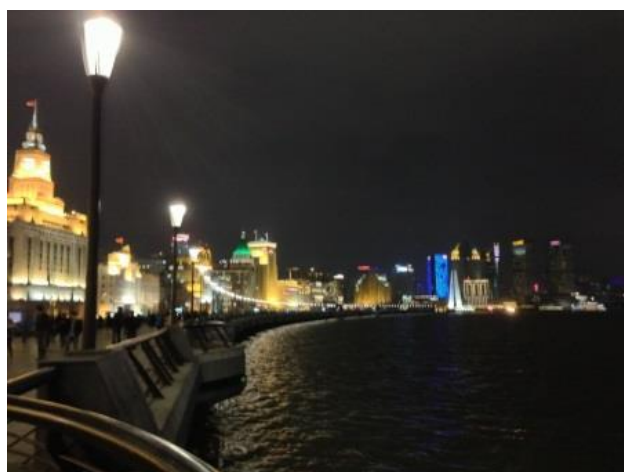
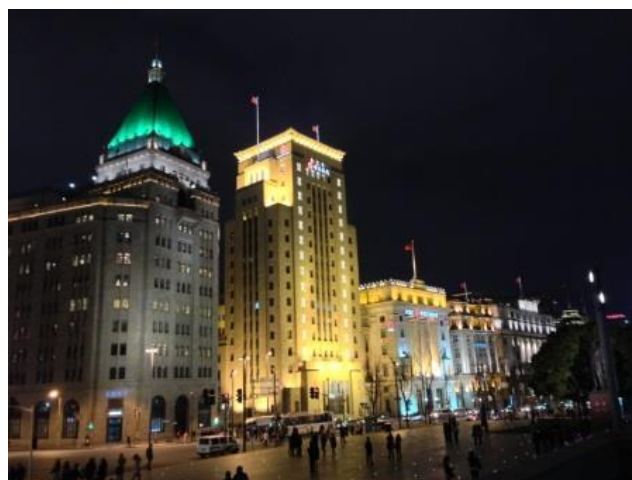
■外灘(バンド)の夜景に震える

仕事が片付き、Business Partner との夕食も終えてから、上海で「是非ここだけは見ておくべき」というところを案内頂きました。夜でしたから、夜景がきれいなところで、外灘(バンド)という、河をはさんで対照的な新旧の建物が並んでいるところです。

知っている方も多いと思いますが、ご存じない方のために、百聞は一見にしかずということで写真をご覧ください。



外灘(バンド)の“こっち側”の景色



河沿いに建物が並ぶ



外灘(バンド)の“あっち側”の景色

写真では伝わりにくいかもしれませんが、Scale が大きい！

Singapore にも夜景がきれいなところがあります。もちろん日本にも。外灘のそれは、きれいなうえに大きい！もっと大きなものは他にもあるのですが、私がこれまで見たものの中では、大きさといい、煌びやかさといい、古い建物と新しい建物の対照性といい、飛び抜けていて、子供のようにはしゃぎながら写真を撮りました。おかげで手ぶれ写真ばかりでお見せできないボツ画像だらけだったのが残念ですが...

新たな国に行ってその国の都市を自分の目で見ると、日本が一番良い国、と盲目的に思い込んでいた認識が崩れていきます。ちょっと寂しい気はしますが、この認識や感覚は大切だと思っていて、決して卑下することではなく、あらたに感じた変化を受け入れていくことを重要視しています。

蛇足ながら、この時は3月末で夜はまだ寒い時期で、別の意味でも震えていました...

■おわりに

今回、再度の機会を頂戴して、番外編をお届けしました。

思い起こすと、昨年4月に Cambodia に出張してからまだ1年程度しか経っていません。実際に各国に降り立ち、自分の目で見て、人と接してきたことで、明らかに視野は広がり、海外への関心は高まり、我が事として捕えるように変わってきました。以前に英語の勉強をした時には大して上達せず、どうしたものかなと思ったものでしたが、今は必要性を切実に感じているせいか、ちょっとはできるようになったと思えるくらいの変化はあります。今さらに考えていることは、自分の行動特性をどうするか、ということです。典型的な日本人である自分は、Communication は High Context(皆まで言わなくても分かる/分かってほしい)式ですし、謙遜は美しいと思いますし、自己 appeal は得意ではありません。ここまでこれで通してきた自分の根幹を変えることは現実的にできないでしょうが、少なくとも、場面によって切り替えるとか、これまでと違う行動をとる割合を増やす、ということは必要だと考えています。このようなことを一年前はあまり考えていませんでしたから、この変化は我ながら好ましく思っています。

軽いコラムの形式で出張時のことを書いてまいりましたが、アジアを身近に、そして我が事としてとらえるための一助になれば、このうえない幸いです。

次の番外編発行は全くの未定ですが、このコラムでなくても別の場で、できればアジアのどこかの国で(!)お会いできることを期待して筆をおきます(“Key から離れます”と書くべきか?)。

今回もお付き合いいただき、ありがとうございました。

グローバル ナレッジ ネットワーク株式会社 柳 恵太

【執筆者】

柳 恵太（やなぎ けいた）

グローバルナレッジネットワーク株式会社

サービス戦略本部 本部長

ソフトウェアベンダー、メーカーにて主に移動体通信システム開発のエンジニアおよびプロジェクトマネージャを経て、2005年にグローバル ナレッジ ネットワークに入社。新サービス立ち上げや技術者育成カリキュラムの企画・開発・実施、大型プロジェクトのマネジメント等の業務を経て、2011年9月から現職。

現在は、サービス企画、マーケティング、海外展開等を推進する部門を統括。



【グローバルナレッジについて】



Global Knowledge.

グローバルナレッジネットワーク株式会社は、世界約30か国に展開するITとビジネススキルのトレーニングプロバイダーです。国内外で活躍するビジネスパーソンに向けて、ヒューマン・スキルやビジネススキル、オリジナルITトレーニングやITベンダーの認定トレーニングを提供しています。

▽あるビジネスマンの「アジア出張記。」はこちらのサイトでもご覧になれます

<http://blog.globalknowledge.co.jp/asia/>